

九州国立博物館
紀要「東風西声」第20号 抜刷
2025（令和7）年3月

【連載】金子量重氏収集資料研究 2

朝鮮時代の獣毛製綴織敷物（K646）について

望 月 規 史
桑 原 有 寿 子



原色図版14 「鶴文綴通」（K646、当館所蔵）



原色図版15 「鶴文綴通」（K646）拡大



原色図版16 「鶴文綴通」（K646）拡大



原色図版17 「鶴文綴通」（K646）拡大



原色図版18 「鶴文綴通」（K646）拡大



原色図版19 「鶴文綴通」（K646）拡大 表面



原色図版20 「鶴文綴通」（K646）拡大 裏面

【連載】金子量重氏収集資料研究 2

朝鮮時代の獣毛製綴織敷物（K646）について

望 月 規 史
桑 原 有寿子

はじめに

本稿では「鶴文綴通」（収蔵品番号 K646 【原色図版14】）について紹介する。朝鮮半島製の毛織敷物の研究史を概括するとともに、当該作品の表現内容と製作技法についての検討を行い、朝鮮王国時代の毛織物の特質について検討する。

1. 収蔵の経緯と現況

この獣毛製綴織敷物は、収集者である金子量重氏が自身の著作のなかで、「双鶴文綴通」として紹介しているものに該当する¹。寄贈に先立って行われた調査で作成された調書によれば、本品の収集地は「ソウル」、収集年は「1970年代」、製作時期は「18-19世紀」としており、2005年度（平成17年度）に九州国立博物館の収蔵品となった。なお、金子氏自身の執筆による「金子量重年譜」によれば、しばしば韓国を訪れていることがうかがえ、特に1970年代は1971年4月、1975年5月、1976年10月、1978年8月と訪韓記録が多い。本品については左記のいずれかの際に現地で入手したものと思われるが、入手経緯の詳細は不明である²。また、本品は、当館の開館時に多くの寄贈品のなかから選抜されて、金子氏の監修のもと「鶴文綴通」の名称で陳列されている。（2005年10月）。その後も当館4階文化交流展示室（関連2室）にて朝鮮半島の民族資料に関する展示に活用されるなど定期的に陳列を行ってきたが、これまで具体的な調査の機会を得ず、詳細不明のままであった。

2. 各地に残る作例とその研究状況

本品（K646）は、上下端に複数色からなるボーダーを伴う五羽の鶴からなる意匠で、中央に首を折り返した鶴を一羽大きくあらわし、これを中心に四隅に一羽ずつ左右が向き合うかたちでやや小ぶりの鶴を配した図様をとるのが特徴である。この五羽鶴の意匠を伴う毛織敷物は、はやくから注目されてきた。京都の祇園祭やその周辺地域で行われる同様の祭礼では、渡来染織品が山鉦（屋台）の胴幕や見送り幕などの懸装品として転用されてきたことがよく知られている。それらは、中国製の綴織やヨーロッパ製のタピスリー（およびタピスリーを中国で模織したもの）のほか、インド更紗や中東地域の絨毯など、その原産地は世界各地に及ぶが、そのなかに朝鮮半島製と考えられている綴織の一群が存在する。いわゆる毛綴であり、木綿等の経糸に対して、羊や山羊などの獣毛から繊維をとって色付けした緯糸を柄の色に合わせて織り込み、一部に描線を伴うのが特徴である。主な意匠としては「玉取獅子」「鳳凰」「虎」「牡丹」「五羽鶴」「窓絵に蝶」などがこれまでに知ら

れている³。こうした意匠からなる綴織は、祇園祭の函谷鉾や月鉾、放下鉾などの胴懸にみられるものであり、そしてこれらは特に各鉾町のあいだでいずれも「朝鮮綴」あるいは「朝鮮毛綴」、また特に放下鉾の場合は「ばけもの氈」の名で伝えられてきたものである。また京都近郊の亀岡で行われる亀岡祭でもこうした「朝鮮綴」は数多く見られる。それらの多くが裁断された状態ではあるが、計11基の曳山のうち、八幡山（西町）、武内山（紺屋町）、蛭子山（塩屋町）、稻荷山（新町・旅籠町）・浦島山（呉服町）、翁山（三宅町）において、懸装品として用いられており、特に安永6年（1777）の箱書銘が伴う竹内山の袖幕や蛭子山の見送幕の下掛は、本品と同様に「五羽鶴」意匠をもつものである。さらに、滋賀県の日野祭でも、岡本町曳山に同様の意匠からなる毛織敷物が確認されている。但しこれは懸装品そのものとして用いられているわけではなく、雪持唐子人形文様を刺繍であらわした見送り幕の基布にされているものである。このほか、煎茶の道具仕立てのなかで、鍋島綴通や赤穂綴通といった日本製の木綿製綴通や中国製の絹製綴通などとならんで敷物として使われる場合があり、さらには京都市内の旧家では風呂上がりのマットの代わりに敷かれていたこともあったと言われ、わが国では本来の用途を離れて用いられていた例が数多くみられる。

このように、わが国では主に近畿地方で古渡りの染織品として珍重された一方、用途に応じてしばしば裁断や改変がなされ、製作当初の姿をとどめるものは比較的少ない。また、個人蔵以外では美術館や博物館での収蔵例も殆ど知られておらず、当館所蔵品のほか数点の作例が知られる程度である。一方、製作地として想定されている韓国でも、かつては存在自体が殆ど認知されておらず、わずかに韓国刺繍博物館所蔵の2点が類例として知られるのみであったが、2016年に京畿女子高校慶雲博物館において開催された展覧会⁴がきっかけとなって認知されるようになり、近年では国立大邱博物館をはじめ韓国国内での収蔵例が増加傾向にある。アジア以外では、イギリスのヴィクトリア&アルバート博物館のランゲウイスコレクションのなかに法量・意匠とも本品とほぼ同じ作品が所在する（図1、縦187.9cm、横134.5cm）。これは、オランダ出身のヤープ・ランゲウイス [Jaap Langevis, 1902-1973] が日本滞在期間中（1952～58年）に他の様々な日本の染織品とともに収集したと考えられるものである。所蔵先では「日本市場向けに中国東北部で制作されたもの」として紹介し、その製作年代を1850～1940年代としているが、その根拠については明示されていない。



図1 五羽鶴図様の獣毛製綴織敷物
（ヴィクトリア&アルバート博物館蔵）

3. 「対馬宗家文書」にみる朝鮮半島製の染織品

上記のように、この毛綴は渡来染織品のなかでも朝鮮半島からの舶来毛織物として大まかに認識されている。だが、現在、朝鮮半島において本品のような獣毛を素材とした伝統的な敷物や壁掛は製作されていないため、伝統工芸品との比較を行うことも難しく、実際にその製作地や伝来経緯を証する手立てはこれまでほとんどなかった。わずかに、祇園祭の放下鉾が有する毛綴の裏面に「押

対馬」の墨書があることが吉田孝次郎氏によって紹介され、「朝鮮綴」という呼び名と併せて宗氏が領していた対馬経由で、朝鮮通信使などによってわが国に将来された可能性に言及がなされた。しかしその一方で、吉田氏自身も「日朝交易品の実態をうかがわせる資料が購入記録、献上目録を伴った第一次資料として世に出ることを切望する」と述べ、実資料と突合せのできる文献資料の登場を期待するにとどまっていた。しかし、当館が所蔵する「対馬宗家文書」のなかに、朝鮮半島製と思われる染織品との関連を想定しうる資料が散見する。ここではその幾つかに触れておきたい。

まず挙げられるのが、「朝鮮国より献上物」(P8497)である。これは、文化元年(1804)に記された朝鮮国王から將軍家に対する献上品を列記したリストであるが、ここで「公方様江」として挙げられた染織品として、「大繻子」のほか「大緞子」、カラムシの茎から製したと考えられる「白苧布」や「生苧布」、木綿を平織にしたと思われる「白綿紬」、麻糸で織った「黒麻布」などさまざまな織物が挙げられている。これらはいずれも朝鮮半島製ないし朝鮮半島経由の産品と考えられる。また、正徳4年(1714)の秋元但馬守喬知・井上河内守正岑・阿部豊後守正喬・久世大和守重之の「老中連署奉書」(P2031)にも、「虎皮」とともに「段子十卷」の記載がみられる。同様の記載は享保2年(1718)に井上河内守正岑・久世大和守重之・戸田山城守忠真の3名から宗義方に宛てた「老中連署奉書」(P2167)にもみえ、朝鮮からの進物として「虎皮」や「朝鮮胡桃子」とともに「段子十卷」が挙げられている。享保2年(1718)に井上河内守正岑・久世大和守重之・戸田山城守忠真の3名から宗義方に宛てた「老中連署奉書」(P2167)にも朝鮮からの進物として「虎皮」や「朝鮮胡桃子」とともに「段子十卷」が挙げられている。これらは、他の進物と同様に朝鮮半島で採取ないし生産されたものであったものと思われる。よりはっきりと朝鮮半島由来の染織品であることがわかるのが、元禄13年(1700)の裏書が残る「老中阿部正武書状」(P714)である。江戸時代前期の忍藩主で老中でもあった安部正武(1649-1704)から宗家へ送られた礼状であり、そのなかに「朝鮮段子三卷」とある。また、対馬宗家から従二位等への「進上目録」(P14317)には「朝鮮人書」とともに「朝鮮織物」との記述があり、少なくとも江戸時代後期には対馬経由で朝鮮製の織物が数多く招来され、進物として扱われていたことがうかがえる。なお、P8497には虎皮や豹皮といった毛皮などと並んで「彩花蓆」の語があることも注目される。「彩花蓆」の名は、朝鮮王国書書の別幅(徳川將軍家に献呈した進物品の目録)にもしばしば挙げられている産品であり、まさしく本品のような毛織敷物に当たるとの見解もあるが、ソウル特別市にある江華島で今も作られているような藺草を素材にした花蓆(図2)が該当するとも言われ、いまだ定見は得られないのが現状である。



図2 江華島特産の蓆
(当館所蔵、K850)

4. 制作年代について

このように、いまだ不明な点が数多い毛織敷物であるが、染織史からの検討を加える前にひとまず本品の製作年代についてひとつの手がかりとなりうるのが、江戸時代後期に松前藩の家老であった蠣崎波響(かきぎきはきょう、1764-1826)が描いた『夷酋列像』である。これは寛政元年(1789)



図3-1 「夷酋列像(チキリアシカイ)」(ブザンソン美術考古博物館蔵)

に蝦夷地東部（北海道東部地域）で起こったクナシリ・メナシの戦い（寛政蝦夷蜂起）で、松前藩に協力したとして功績のあった12名のアイヌを描いた列像図であり、製作直後から平戸・松浦家をはじめ諸藩の大名たちによって多くの模写が作成されていることでも知られているものである。この一連の模写の原本と考えられるのが、寛政2年（1790）の墨書を伴うブザンソン美術考古博物館本である。いずれの人物も精緻かつ極彩色の衣装を纏って描かれ、異国情緒に溢れた作品となっている。もとより『夷酋列像』は実際のアイヌの風俗を反映しているものではなく、異国の者であることを強調した絵であることはこれまでしばしば指摘されるところである。しかしその一方で、彼らが身にまとう衣装や装身具そのものについては、それぞれ極めて写実的であり、個々の持物は民族資料的な同定に耐えうるものである。このことは、蠣崎波響自身が、製作にあたって

それぞれの持物のサンプルにあたるものを実見していたことを意味している。

12名のうち唯一の女性である「室吉律亞湿葛乙」（チキリアシカイ）の画幅（図3-1）には、長方形の敷物に毛皮を重ね、その上に座すチキリアシカイが描かれており、ここに本品と同様の意匠が認められる（図3-2）。大部分を毛皮が覆っているため判別しづらいが、上下をボーダー柄とし、その内側を朱色地に黒い羽を広げた鳥が左右に向かい合う構図であることを見て取ることができる。但し、ボーダー柄より内側には上下とも格子紋が走り、羽も白く縁取りされているなど、細部には違いも見られる。作行としては、ややたどだとしのある当館所蔵品やヴィクトリア&アルバート博物館所蔵品よりも、日野祭岡本町曳山例により近いものと思われる。即ち、『夷酋列像』の原本成立年と亀岡祭竹内山の箱書銘年紀を考え合わせると、五羽鶴図をあらわした毛織敷物については、少なくとも18世紀後半期には既に登場し、かつわが国にもたらされていたことを示していると言えるであろう。



図3-2 同部分(ブザンソン美術考古博物館蔵)

以上を踏まえ、改めて染織史的な観点から本品について以下に詳述する。

5. 本毛織敷物の形態および織り技法について

本作は縦189.1cm、横136.5cmの長方形で、敷物・掛物の類として作成されたと考えられる。織組織は平織で、緯糸を文様に応じて「ぬり絵」のように織り嵌める綴織で五羽鶴を表している。経糸は白の木綿糸で、S捻りの糸を5本ほどZに捻り合わせている。しかし、拡大すると繊維に絹のような艶が見られるため、木綿以外による可能性も含む。経糸は本作上部は切り放しであるが、下部では1.3cm程緯糸の打ち込みがない場所を設けた状態でループ状に返っている【原色図版15】。強めにかけた経糸の捻りが戻ろうとする力によって、房状を呈している。このことから、この織物は奇数番の経糸と偶数番の経糸が同じ糸で織成されていること、また本作の下部は、織りはじめであることがわかる。緯糸は太さのある獣毛で、薄紅、桃、白、薄黄、茶、薄茶、萌黄の7色で構成

される。綴織は、文様の輪郭線で色糸（色緯）を折り返す。このため文様の境目、とくに縦にまっすぐ色が変わる部分では、それぞれの色緯が経糸と経糸の間を境にして左右に戻ってゆき「はつり孔」と呼ばれるスリットが現れるのが一般的である。しかし本作にははつり孔は見られない。これは、左右の色緯をともに同じ経糸に絡ませる「ドブテイル（ダブテール）」という、はつり孔の発生を防ぐための技法が用いられていることによる【原色図版16】。

本作の上部右には墨書で「九如」と書かれるか、印で押されている【原色図版17】。「九如」とは中国の『詩経』『小雅－天保』にある天子の長寿福禄を祈る詩に由来し、そこから転じて「天保九如」は長寿を祝する言葉として用いられる。またその詩の情景を描き表した山水画が中国絵画では吉祥画として好まれた。鶴文は「九如」の中には含まれないが、吉祥画題として製作された可能性がこの墨書から指摘できる。また、おなじく上部右の裏面には墨文方印が見られるが、残念ながら解説不明である【原色図版18】。

6. 本毛織敷物の製作目的について

先述のように、本作には「はつり孔」が生じない工夫がされている。綴織は、西洋の室内装飾具として隆盛したタピスリーにも用いられている技法で、基本的には壁掛けに用いられるそれらは、本作と同様に獣毛を用い、ドブテイルや「インターロック」（左右の色緯同士を交差させてから折り返す技法）などを用いて、はつり孔が発生しない工夫がされている。反面、綴織は東アジアでも古くから織られていたが、はつり孔を消すような技法はあまり用いられていない。本論2章において、本作の類例が「朝鮮綴」として祭礼鉾の懸装品に用いられていることが述べられた。またその懸装品には、本作のように朝鮮半島製と思われるものの他に、中国製の綴織、ヨーロッパのタピスリー（及び中国における模織）、中東の絨毯、インド産の更紗などの渡来染織品が含まれていることも前述された。これらの多くは、大航海時代に始まる、各地におけるヨーロッパへの輸出用染織品の製作が大きく関わっている。祭礼鉾の懸装品にとりわけヨーロッパ輸出用染織品が多く含まれること、また本稿で取り上げる「鶴文綴通」（K646）がタピスリーのようにはつり孔が発生しない工夫を行っていること、加えて東アジアではあまり用いられない獣毛によることから「朝鮮綴」と呼称されていた本作のような朝鮮半島製の吉祥文様敷物は、朝鮮王朝期に對外輸出用として織成されたものである可能性が高いと考えられる。なお、ヨーロッパ輸出用の中国産染織品として、当館所蔵の刺繍布（II8、図4）などの粵繡とよばれる刺繍が名高い。中央に円を配し、その中と周囲を鳳凰や牡丹、瑞獣などで埋めるのが定型の一つである。また、祇園祭の占出山の懸装品には、本作と粵繡の中間的表現の作例が見ら



図4 清代の刺繍装飾布（当館所蔵、II8）



図5 占手山見送（祇園祭山鉾連合会）

れる（図5）。これは絹による綴織で、先行研究では17世紀中頃の中国産のものとされているが⁵、牡丹の形状や、色替わりの表現などは、いわゆる「朝鮮綴」に近い。実見調査の機会を得ていないため明言はできないが、中国の綴織に類例がないことも含め、この作例が朝鮮半島製である可能性は高いものとする。構図はヨーロッパ輸出用の構図そのものであり、いわゆる「朝鮮綴」がこういったものから始まり、獣毛による吉祥文様の敷物としてパターン化されていったものである蓋然性は高い。

なお、本作は表側のみ毛羽立ちが擦り切られていることから【原色図版19、20】、製作当初から敷物などの表裏あるものとして製作されたことが今回の調査で判明した。今後も海外の類例を中心に調査を継続し、製作年代についても考察をすすめてゆきたい。

註

¹ 金子（2011）329頁

² 「金子量重アジア民族造形コレクション資料カード No301～662」に記載。

³ 吉田（1995）47頁

⁴ 特別展「「朝鮮綴」をご存知ですか」（会期：2016年10月～2017年2月）

⁵ 祇園祭山鉾連合会（2015）107頁

参考文献

井上瑠菜「蠣崎波響<夷酋列像>にみる「かたち」の継承－近世日本における図像の転用－」『人文社会学論叢』第29号、2020年

金子量重『アジアの民族造形 「学び」と「遊び」と「芸能」の美』毎日新聞社、2011年

金子量重先生古稀記念論集刊行委員会『アジアの民族造形文化』徴蔵館、1996年

杉原たく哉「蠣崎波響筆「夷酋列像」の図像学的考察」『てらゆきめぐれ 大橋一章博士古稀記念美術史論集』中央公論社出版、2013年

新田摂子「沖縄染織品のヨーロッパへの移動について」『沖縄芸術の科学』第34号、2022年

日野町教育委員会『日野曳山調査報告書』日野町教育委員会、1990年

北海道博物館（編）『夷酋列像 蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界』「夷酋列像」展実行委員会、北海道新聞社、2015年

望月規史・磯部直希「京滋地域における曳山の装飾美術的研究－調査の目的と経過報告」『アート・リサーチ』第4号、アートリサーチセンター、2004年

吉田孝次郎「祇園会と渡来懸装染織品」『日本研究』第9号、1993年

吉田孝次郎「祇園祭、山・鉾を飾る懸装品－渡来染織品を中心として－」第51号、1995年

祇園祭山鉾連合会『祇園祭山鉾懸装品調査報告書 渡来染織品の部』2015年

李元植『朝鮮通信使の研究』思文閣出版、1997年

Wilson, Verity *Chinese textiles*, V&A Publications, 2005.

画像引用元

【原色図版14】九州国立博物館

【原色図版15～20】 桑原撮影

(図1) V&A HP (コレクション DB より)

(図2) プザンソン美術考古博物館蔵 HP (コレクション DB より)

(図4) コルベース

(図5) 祇園祭山鉾連合会 (2015) 107頁より転載

(もちづき のりふみ 当館学芸部企画課特別展室主任研究員)

(くわばら ゆずこ 当館学芸部企画課研究員)